

[D年] 聖霊降臨日(2024年5月19日)**【旧約聖書日課】エゼキエル書 37章1～14節**

1主の手がわたしの上に臨んだ。わたしは主の霊によって連れ出され、ある谷の真ん中に降ろされた。そこは骨でいっぱいであった。2主はわたしに、その周囲を歩き巡らせた。見ると、谷の上には非常に多くの骨があり、また見ると、それらは甚だしく枯れていた。3そのとき、主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか。」わたしは答えた。「主なる神よ、あなたのみがご存じます。」4そこで、主はわたしに言われた。「これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。5これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。6わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。そして、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。」7わたしは命じられたように預言した。わたしが預言していると、音がした。見よ、カタカタと音を立てて、骨と骨とが近づいた。8わたしが見ていると、見よ、それらの骨の上に筋と肉が生じ、皮膚がその上をすっかり覆った。しかし、その中に霊はなかった。9主はわたしに言われた。「霊に預言せよ。人の子よ、預言して霊に言いなさい。主なる神はこう言われる。霊よ、四方から吹き来れ。霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る。」10わたしは命じられたように預言した。すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となった。11主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。彼らは言っている。『我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる』と。12それゆえ、預言して彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。わたしはお前たちの墓を聞く。わが民よ、わたしはお前たちを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く。13わたしが墓を開いて、お前たちを墓から引き上げるとき、わが民よ、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。14また、わたしがお前たちの中に霊を吹き込むと、お前たちは生きる。わたしはお前たちを自分の土地に住ませる。そのとき、お前たちは主であるわたしがこれを語り、行ったことを知るようになる」と主は言われる。

【使徒書日課】使徒言行録 2章1～11節

1五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4すると、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

5さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、6この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。7人々は驚き怪しんで言った。「話しているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。8どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。9わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、10フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、11ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞くとは。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 14章15～27節

15「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。16わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。17この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。18わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。19しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。20かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内におることが、あなたがたに分かる。21わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である。わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す。」22イスカリオテでない方のユダが、「主よ、わたしたちには御自分を現そうとなるのに、世にはそうなさらないのは、なぜでしょうか」と言った。23イエスはこう答えて言われた。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしはその人のところに行き、一緒に住む。24わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。25わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。26しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。27わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エゼキエル書 37章1～14節

1主の手が私に臨んだ。主はその霊によって私を連れ出し、平野のただ中に私を置いた。そこには骨が満ちていた。2主は私にその周囲を行き巡らせた。すると、その平野にはおびただしい骨があり、それは枯れ果てていた。3主は私に言われた。「人の子よ、この骨は生き返ることができるか。」私は言った。「主なる神よ、あなたはご存じます。」4主は私に言われた。「これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。5主なる神はこれらの骨にこう言われる。今、私はあなたがたの中に霊〔別訳→息〕を吹き込む。するとあなたがたは生き返る。6私はあなたがたの上に筋を付け、肉を生じさせ、皮膚で覆い、その中に霊を与える。するとあなたがたは生き返る。こうして、あなたがたは私が主であることを知るようになる。」

7私は命じられたように預言した。私が預言していると、音がした。地響きがし、骨と骨とが近づいた。8私が見ていると、それらの上に筋ができ、肉が生じ、皮膚がその上を覆ったが、その中に霊はなかった。9主は私に言われた。「霊に預言せよ。人の子よ、預言して霊に言え。主なる神はこう言われる。霊よ、四方から吹いて来い。これら殺された者の中に吹きつけよ。すると彼らは生き返る。」10私が命じられたように預言すると、霊が彼らの中に入った。すると、彼らは生き返り、自分の足で立ち、おびただしい大軍となった。

11主は私に言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルのすべてである。彼らは、『我々の骨は枯れ、我々の望みはうせ、我々は滅びる』と言っている。12それゆえ、預言して彼らに言いなさい。主なる神はこう言われる。私の民よ、私はあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げ、イスラエルの地に導き入れる。13私の民よ、私があなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓から引き上げるとき、あなたがたは私が主であることを知るようになる。14私があなたがたの中に霊を与えると、あなたがたは生き返る。私はあなたがたを自分の土地に安住させる。その時、あなたがたは主である私がこれを語り、行ったことを知るようになる――主の仰せ。」

使徒言行録 2章1～11節

1五旬祭の日が来て、皆が同じ場所に集まっていると、2突然、激しい風が吹いて来るような音が天から起こり、彼らが座っていた家中に響いた。3そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他国の言葉で話した。

5さて、エルサレムには天下のあらゆる国出身の信仰のあついな人々〔異本→ユダヤ人〕が住んでい

たが、6この物音に大勢の人が集まって来た。そして、誰もが、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられた。7人々は驚き怪しんで言った。「見ろ、話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。8どうして、それぞれが生まれ故郷の言葉を聞くのだろうか。9私たちの中には、バルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、10フリギア、パンフィリア、エジプト、リビアのクレネ側の地方に住む者もいる。また、滞在中のローマ人、11ユダヤ人や改宗者、クレタ人やアラビア人もいるのに、彼らが私たちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

ヨハネによる福音書 14章15～27節

15「あなたがたが私を愛しているならば、私の戒めを守るはずである。16私は父にお願いしよう。父はもうひとりの弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。17この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、それを受けることができない。しかし、あなたがたは、この霊を知っている。この霊があなたがたのもとにおり〔直訳→どまり〕、これからも、あなたがたの内にいるからである。18私は、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。19しばらくすると、世はもう私を見なくなるが、あなたがたは私を見る。私が生きていますので、あなたがたも生きることになる。20かの日には、私が父の内におり、あなたがたが私の内におり、私があるあなたがたの内におることが、あなたがたに分かる。21私の戒めを受け入れ、それを守る人は、私を愛する者である。私を愛する人は、私の父に愛される。私もその人を愛して、その人に私自身を現す。」22イスカリオテでないほうのユダが、イエスに言った。「主よ、私たちにはご自分を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、なぜでしょうか。」23イエスは答えて言われた。「私を愛する人は、私の言葉を守る。私の父はその人を愛され、父と私とは〔直訳→私たちは〕その人のところに行き、一緒に住む。24私を愛さない者は、私の言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉は私のものではなく、私をお遣わしになった父のものである。」

25私は、あなたがたのもとにいる間、これらのことを話した。26しかし、弁護者、すなわち、父が私の名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、私が話したことをことごとく思い起こさせてくださる。27私は、平和をあなたがたに残し、私の平和を与える。私はこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・5月19日「聖霊降臨日」の日課主題は「聖霊の賜物」。「聖霊降臨日」は、「復活日」から七週間後、五十日目に祝う祭りで、元来はユダヤ教の祭りである「七週祭」＝「五旬祭(ペンテコステ)」の呼称をそのまま借用している。「復活祭」がユダヤ教の「過越祭」の再解釈として発展したように、初期教会は、ユダヤ教の「七週祭」の再解釈として「五旬祭」＝「聖霊降臨祭」を位置づけてきた。ユダヤ教の「七週祭」は、エジプトを出たモーセとイスラエルの民がシナイ山で律法を授与され「契約の民」とされたことを記念するものとして祝われてきた。キリスト教会は、これを「聖霊降臨」の出来事結び付けることで、「律法の再授与」による「新しい契約の民」の誕生を記念するものとしてきた。

・旧約聖書日課は、「エゼキエル書」から、「枯れた骨」のイメージで「民の復活」が告げられる預言の箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、五旬祭に弟子たちが経験した聖霊降臨の出来事を伝える箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、最後の晩に弟子たちと交わされた会話の中で「聖霊」の授与の約束が告げられる箇所。

旧約日課(エゼキエル 37 章より)

・「エゼキエル書」については、資料「聖書と祈りの会 240424」も参照。

・「預言者エゼキエル」は、前 598 年ごろに起こった南王国ヨヤキン王の捕囚に伴ってバビロンに移住した祭司集団の子で、バビロンの地で祭司任職を受け、おそらく捕囚王宮のヨヤキン元王に仕える「宮廷預言者」として、王国滅亡期およびバビロン捕囚時代に活動した。預言の多くは、各書で捕囚からの年月が付される様式で記されている。日課箇所は、32:1 や 33:21 にある「捕囚の第十二年」という年月設定の枠に含まれると考えられる。これは、バビロニア王ネブカドネツアルによってエルサレムが陥落、破壊され、ユダの地におけるダビデ王国が滅亡した年(前 587 年頃)の翌年と考えられる。この王国滅亡の根本原因を問うて、本預言書は、イスラエル≒ユダに立てられてきた「牧者」＝「指導者」の主なる神に対する背信と民に対する搾取の責任が問われ、彼らが主なる神によって排除されたとするが、同時に、「神の羊」であるイスラエルの民を神自ら世話するために「新しい牧者」として「僕ダビデ」を起こすと告げている(36 章)。これらを踏まえて、失われていた「神の羊」が回復されることをたとえて、「枯れた骨」となっていたイスラエルに神から新たな「霊」が吹き込まれて命を回復させられ、起き上がられるという「復活」を告げるのが、日課箇所の預言である。

・「枯れた骨の復活」は、「主の霊」が吹き込まれることによって起こることとして描かれ、原語本文では日課箇所だけで少なくとも 9 回、「霊(ルアハ)」という語が

集中して用いられている。旧約全体で「霊」の用例は広範に見られるが、本預言書における「霊」概念は、36:25~27 に見られるように、独自性が強い。すなわち、まず人の心や行動を支配するものとしての「霊」概念があり、人が「自分の霊」に支配されている状態では神に離反する者であるから、支配する「霊」を「主の霊」に置き換える必要がある、とされる。そこで、日課箇所でも「主の霊」によって起こるとされる「復活」も、ある種の悔い改めによって起こされる内面の刷新、行動原理の新生・変容として、告げられているのである。

使徒書日課(使徒 2 章)

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続編として編纂された「初期教会正史」を描く歴史物語文書。エルサレムに拠点を置いた「使徒たちを中心とするガリラヤ以来の弟子集団」を「主イエス昇天と聖霊降臨」を起点とする「教会」として位置づけ、「使徒ペトロ」らを中心とする「主流派の教会」と、そこから派生して「異邦人伝道」に大きな活路を開いた「パウロらの教会」が、対立や不和を乗り越えて、ローマを拠点とする「教会」において一つに集結していく、という歴史観をもって物語が展開されている。パウロが登場した後の物語は、「パウロ書簡集」の背景にある現実と重なり合うものであり、初期教会で起こった出来事を理解する上で相互に補完し合う資料と見ることができる。

・日課箇所は、本書の物語の起点となる「昇天と聖霊降臨」にまつわる説話の一部で、いわゆる「ペンテコステの聖霊降臨」の出来事を伝える唯一の記事と解されてきた。それによれば、「聖霊降臨」は、「復活」から 50 日という期間を経て起こったことであり、その途上である 40 日目に「昇天」という出来事が位置づけられることによって、この「聖霊」が「天から地へ降った」という空間的理解が定着することになった。ところで、「復活・昇天後の聖霊降臨」が「教会」の起点に必須の出来事であるかと問うならば、「使徒言行録」の前巻を構成する「ルカ福音書」と同様の理解を示すのは、「ヨハネ福音書」だけということになり、「マタイ福音書」および「マルコ福音書」は、これを必須の出来事としていえるとは言えない。「ヨハネ福音書」は、「ルカ福音書」とおそらく同じ伝承に基づいて、復活して現れた主イエスが弟子たちに「聖霊を受けなさい」(ヨハネ 20:22)と告げられたことを伝えているし、「最後の晩」の弟子たちの教えの中でも繰り返し「聖霊授与」の約束が告げられている(14~16 章)。他方、「マタイ福音書」と「マルコ福音書」が「聖霊」の授与について言及しているのは「主イエスの洗礼」の出来事の逸話に限られており、「洗礼」における「聖霊授与」という各個人ごとに起こる出来事としてこれを捉えている。また、「マタイ福音書」に関して言えば、「教会」の起点は、ペトロの信仰告白に対する「鍵の授与」の宣言(16 章)や、復活された主イエスによる「大宣教命令」(28 章)などに置いていると見ることができるだろう。

福音書日課(ヨハネ 14 章より)

・日課箇所は、主イエスが「最後の晩」に弟子たちと食事を共にされた際に語られた教えとしてまとめられた中の一部で、主イエスが弟子たちの前から去られた後に「弁護者」としての「聖霊」が弟子たちに与えられることを繰り返し告げる言説の一つである。

・「弁護者」の原語ギリシア語は「パラクレートス」で、「慰める／励ます」などの意味で用いられる「パラカレオー」の行為主体者化した名詞形である。「パラカレオー」およびその名詞形「パラクレシス(慰め／励まし)」は、「パウロ書簡集」で多用される用語。「弁護者」という訳語は、この語「パラカレオー」の原義が「傍らに(パラ)」+「呼ぶ(カレオー)」であることから、人の傍らに立って援助したり代弁したりする者のことを指して用いられたことによる。「ヨハネ福音書」は、主イエスを「思弁的な教師」として描く傾向にあるが、弟子たちと共にあったときの主イエスはまさにその「思弁的な教師」として弟子たちのために「真理」を語られる方として描かれている。その主イエスが弟子たちの前から去られるに際して、残された弟子たちが主イエスのように思弁的に「真理」を語ることができるかどうかという問題に対して、「真理の霊」授与の約束は、一つの答えを示そうとしているのだろう。この「聖霊」が、主イエスの「死と復活(昇天)」の後、主イエスに代わる「弁護者」として描かれるのは、「ルカ文書」が構想するような「復活昇天後の聖霊降臨」という考え方に調和させていることかもしれない。

・「聖霊」の授与と共に約束される「平和」の授与は、復活された主イエスの御言葉にも見られる結びつきで(20:19,21,22,26)、「ルカ文書」とも共通する(ルカ 24:36,49)。「平和(エイレーネ)」は、「ルカ文書」と共に「パウロ書簡集」で多用される用語で、「恵み(カリス)」とセットで神から与えられる祝福として告げられる用例が多数みられる。

来週の誕生日 (5月19日～25日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-343 番「聖霊よ降りて」(= I 499 番)は、19 世紀米国メソジスト教会の牧師ストークスの作詞。曲は、日本のメソジスト派讃美歌集『譜附基督教聖歌集』(1884 年)の編纂に際して依頼して作曲された。

・21-344 番「聖霊の神よ、きよき愛よ」(= II 17「みたまのかみ きよきあいよ」)は、14-15 世紀イタリアのジェズアティ修道会(17 世紀にヴァチカンによって活動禁止された)の修道士「シエナのビアンコ」作詞の讃歌。19 世紀に紹介された英訳詞にヴォーン・ウィリアムズの曲が付された。

・21-345 番「聖霊の力にあふれ」は、20 世紀英国教会司祭ピーシーの作詞に、同じく英国教会司祭で王立音楽学校チャブレンのテイラーの曲が付されている。ピーシーの創作活動は最晩年。

21-343「聖霊よ、降りて」=I499**Hover o'er me, Holy Spirit**

1. Hover o'er me, Holy Spirit, / Bathe my trembling heart and brow; / Fill me with Thy hallowed presence, / Come, oh, come and fill me now.

[Refrain]: Fill me now, fill me now, / Holy Spirit, fill me now; / Fill me with Thy hallowed presence, / Come, oh, come, and fill me now.

2. Thou canst fill me, gracious Spirit, / Though I cannot tell Thee how; / But I need Thee, greatly need Thee, / Come, oh, come and fill me now. [Refrain]

3. I am weakness, full of weakness, / At Thy sacred feet I bow; / Blest, divine, eternal Spirit, / Fill with pow'r, and fill me now. [Refrain]

4. Cleanse and comfort, wholly save me, / Bathe, oh, bathe my heart and brow; / Thou dost sanctify and seal me, / Thou art sweetly filling now. [Refrain]

21-344「聖霊の神、きよき愛よ」**Discendi, amor santo**

1. Discendi, amor santo, Visita la mie mente / Del tuo amore ardente, / Si che di te m'infiammi tutto quanto.

2. Vienne, consolatore, Nel mio cuor veramente: / Del tuo ardente amore Ardel veracemente: / Del tuo amor / coccente Si forte sie ferito: / Vada come smarrito / Dentro e di fuore ardendo tutto quanto.

3. Arda sì fortemente Che tutto mi consume, / Si che veracemente Lassi mondan costumi: / Li splendenti lumi Lucenti, illuminanti / Mi stien sempre davanti, / Per li quali mi vesta il vero manto.

4. E 'l manto chi' i' mi vesta Sie la carità santa: / Sott' una bigia vesta Umilità si canta, / La qual mai non si vanta Per se nullo ben fare, / Non si sa inalzare, / Ma nel profondo scende con gran pianto.

5. Nel fondo più profondo Discende nel suo cuore: / Di ciascun uom del mondo Sè ved' esser minore: / Non si cura d' onore, Ma le vergogne brama: / Di se vendetta chiama, / O dia se stesso sempre in ogni canto.

6. Se dagli altri è inalzato Nel cuor sempre discende, / Del ben che 'gli ha, ingrata Sè esser sempre intende. / Chi tale stato prende Già ma' non può perire: / Vita si gli è 'l morire, / Morendo vive e vivend' è poi santo.

7. In queste duo colonne Si ferman gli amaderi, / Perchè sòn le madonne Sopra l' altre migliori: / Chi ben c'è ferm', ardori Sì grandi sente al cuore, / Che grida per amore, / Che sostener nol può, si è tamanto.

8. Sì grande è quel disio Ch' allor l' anima sente, / Che dir nol sapre' io, A ciò non son potente: / Nulla umana mente Entender nol potria, / Se nol gustasse pria Per la virtù dello Spirito Santo. / Deo gratias. Amen.

21-345「聖霊の力にあふれ」**Filled with the Spirit's Power**

1. Filled with the Spirit's power, with one accord / the infant church confessed its risen Lord. / O Holy Spirit, in the church today / again your power of fellowship display.

2. Now with the mind of Christ set us on fire, / that unity may be our great desire. / Give joy and peace, give faith to hear your call, / and readiness in each to work for all.

3. Widen our love, good Spirit, to embrace / the people of all lands and every race. / Like wind and fire, with life among us move, / till we are known as Christ's and Christians prove.